

一〇月二五日（水）

笠井さんとコーヒを飲みながら、哲朗が来るのを待っている。僕はアイスコーヒを飲み、笠井さんはホットコーヒを飲んでいる。彼はカッターシャツの上にベストまで着込んでいた。

「すっかり冬の装いですね」

僕に比べれば厚着の彼に、僕はそう言った。彼は苦笑いを浮かべながら、「いやいや、コレはそこまで分厚くないですから」とベストを摘みながら言った。

「週末ぐらいから、また冷え込むって言っていましたよ」

「もう十一月ですもんね」

多少寒くてもあまり厚着をしない僕でも、流石にそろそろジャケットやコート  
を羽織らないとダメかもしれない。日中の日向はまだまだ暑い分、朝夕の冷え込みとの落差が体に堪える。

笠井さんは自分のシステム手帳を見ながら、何かを言おうと顔を上げた。その顔の奥に、哲朗の姿が見える。僕は椅子から立ち上がり、手を振った。哲朗は小走り「遅くなって、すみません」と近づいてくる。

僕は財布を握ってレジの方を指しながら、「なんか頼む？」と彼に尋ねる。哲朗は空いている椅子に腰も下ろさず、「いえ、すぐに戻らなきゃいけないんで」と言った。

「そっか、そっか。じゃあ、とりあえずコレ」

立ったままの彼に、椅子に腰を下ろしたまま半分に畳んだA3用紙を差し出した。

「再来月はコレで決まりそうだから」

哲朗はA3用紙を開き、横長の紙にザッと目を通す。

「了解しました。で、コレだけですか？」

哲朗は再び用紙を半分に畳んで持ち、ゆつくりした口調で僕らに確かめる。僕は頷きながら、「忙しいのに、ごめんね」と答えた。

「データで送ってもらえば良かったのに」

「せっかく印刷してもらったからさ。それにコッチがついでだから」

僕は真新しいクリアファイルも哲朗に差し出した。彼はそれを受け取ると、

「じゃあ、戻りますよ？」と確かめ、僕が頷いて返すと、「じゃあ、失礼します」と資料をクリアファイルに入れ、来た時と同じような小走りであつた道を戻つて行つた。

「なんか、すみません。僕がランチしましょうと言つたばかりに」  
笠井さんは椅子に座つたまま深々と頭を下げた。

「いえいえ、気にしないでください。そういうのも大事じゃないですか」

忙しそうな哲朗には申し訳なかつたが、たまにはこうなつてしまう日もある。彼には後で何らかのフォローを入れておけば何とかなる。

「そういえば、さつき何か言おうとしてませんでした？」

僕は、哲朗が来る直前の笠井さんを思い出し、彼に訊ねてみた。彼は「ああ」と再びシステム手帳を開きながら、「来週一日、息子さんの誕生日ですよね？」と言つた。

「え、そんなことまでメモしてくれてるんですか？」

「ええ、まあ。大したことじゃないんですけど」

笠井さんは謙遜するが、彼の付き合いを考えると、膨大な量のメモがあの手帳には書き込まれていることになる。その量を想像するだけでも気が遠くなるが、彼はそういうのが得意そうなものもなく分かつてしまう。

「中学一年生、でしたっけ」

「そうです、そうです」

笠井さんは「いやあ、若いなあ」と声を漏らしながら、システム手帳をゆつくり閉じた。

「将来の進路は」

「いや、まだまだ全然」

「そうですか。娘さんも優秀だからな」

智希も陽菜も、直接笠井さんとの面識はなかつたはずだけど、彼は色んな情報を整理して、彼や彼女らを想像しているように見える。この細かさがあればこそ、か。せめて薄手のベストかホットコーヒーぐらいは見習わなきゃ……。

初出 令和三年一〇月二七日 カクヨムにて公開